十一世紀にむけて幼児教育を考える(10)

人間らしさの回復

秋山　和夫

「道徳なき社会」というと少し表現がきついかもしれない。非行、暴力、いじめといった子どもの問題行動なども、自己中心の欲求充足のためには手段を選ばないで行動するという考え方が、その背景にある。

車内で、お年寄りや身体の不自由な人へ座席を譲らない若者は多い。そこには、自分は早くから来て座席を取っているのだ、おそく乗った者は立つのが当然だといった、自己中心的合理主義が、若者の人生観を支えているのであろう。他人に対する思いやりの心は極めて乏しいのである。

現代の青少年の行動や意識を憂えるおとなは多い。こうした青少年が育った理由は

決して単一ではない。しかし、その中のひとつとして、幼児教育のあり方を考えてみることはできないだろうか。

「三つ子の魂百まで」ということわざがある。三歳を中心にした幼児期に身につけたものは、その人の生涯にわたって強い影響力を持ち続けるということを、人々は生活の知恵として経験的に気づいていたのであろう。

三歳頃は、基本的な生活習慣や、物の考え方を形成していく上で大切な時期である。おとなの指示に素直に従い、習慣化されやすい時期である。「狼に育てられた少女」の話に象徴されるように、人間は環境に影響されるところが大きく、幼い時ほどそれは大きい。

生活習慣を始めとする生活態度、他人に対する思いやりの心、人とうまくかかわる力、人間として基本的に備えておくべき心情や態度などは、子どもに生得的に身についているわけではない。学習することによって、はじめて身につけることができるのである。この点は、知識や技能の学習と全く同じである。

現代の青少年には、人間として基本的に備えておくべき心情や態度が身についていない、と言える。

こうした側面の教育を訓育という。訓育はわが国では、学校教育の主要課題ではなく、それはむしろ家庭教育の役割であった。

第二次大戦前の社会においては、家庭や地域に教育力が備わっていた。柳田国男が

言うような「笑いの教育的効用」を可能にするような地域の共同体規制、年中行事、通過行事、遊び仲間、三世代家族――こういう伝承的な習俗や行事、生活実態などが、子どもの教育に重要な役割を果していた。いわゆる「隠されたカリキュラム」が子どもの訓育的側面の教育を担っていた。

このようなことを前提にして、学校は知識や技能などの陶冶的側面の教育に力を注いでおればよかった。

幼稚園も例外ではなかった。遊び方や仲間とのつき合い方も地域の遊び仲間の中で教えられ、身につけてきていた。基本的な生活習慣も遊び仲間や家庭の中でしつけられていた。幼稚園はそうした子どもの生活実態を前提にして、幼稚園の指導を展開することができた。

ところが、現在では核家族で兄弟姉妹の数は一・五人以下ということで、一人っ子の割合も高い。遊び場も遊び仲間もなく、兄弟姉妹のいない子どもたちは、テレビやファミコン、雑誌などを相手に、狭い家の中で一人遊びをして時間を過ごす。または、早期才能開発教育のための塾やおけいこごとにはげむといった状態がかなり一般化してきている。

そのために、相当量の文字や知識などを身につけた幼児が入園してくることになる。反面、社会性や基本的生活習慣や、人間として身につけておくべき心情や生活態度などは白紙に近い子どもたちも目立つようになってきている。

古来、子どもは友だちとの遊びの中で、友だちとのかかわり方を学び、友情の大切さや協力することの必要性に気づき、思いやりの心をはぐくんでいった。また、動植物や自然現象に接する中で、自然の偉大さ、不思議さを感じ、自分の思うようにならない世界のあることに気づき、自然に対する畏敬の心を育てていったのである。遊ぶことを通して、生きるために必要なさまざまな能力や知恵を獲得していった。その意味で遊びの人間形成に果す役割は大きいと言わなければならない。

子どもの中に人間らしさを回復する道は、遊びの回復以外にないと私は思っている。

二十一世紀は、現在以上に子どもの生活環境は悪化していくのではないか。

広い遊び場、豊かな遊具、多くの友だち、すぐれた教師という条件の備わった幼稚園の役割は、子どもの人間形成のために見直され、その役割が増し重要になっていくものと思われる。

人に対するやさしさと思いやりの心を持ち、バランス感覚に支えられて生活する力を持った子どもの育成によってのみ、二十一世紀の展望が開けるであろう。

（山陽学園大学）